

---

# エルおばあちゃん達

枯葉花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エルおばあちゃん達

### 【Nコード】

N9646Y

### 【作者名】

枯葉花

### 【あらすじ】

仲良し(?)四兄弟は、英雄とつたわれるエルおばあちゃんのこと、気になって気になって・・・。  
そんなエルおばあちゃんの過去のお話。

## プロローグ

「おねえちゃん！！大発見だよ！！」

おねえちゃんと呼ばれた、ウールは顔をしかめた。弟であるナイロンが『大発見』と言うのは、たいてい悪いことなのだ。

「何？ロン？あら、けど私。おかあさんに、暇だったらお手伝いしてねと言われてたんだわ。暇じゃないけど、親孝行しましょうっと。」

ナイロンは、姉にかわされたことに気づくと、真っ赤な目で睨んで叫んだ。

「ほんとに大発見なんだよっ！！おねえちゃんが知りたがってた、ポリエステルおばあちゃんの事なんだよ！！」

ポリエステルと聞いて、ウールは目を輝かせてまくしたてた。彼女は喋るのが好きなのだ。

「ほんとに。ホントに？ポリエステル？エルおばあちゃん？あの？ホントにホントなのね。ロン。嘘だったら、承知しないわよ？え、けど。おじいちゃんが全然見してくれないじゃない。なのに何を見つけたっていうの。ロン。ああ！！ロン。早く見せてロン！！」  
狙い通りポリエステルに過剰反応した姉を見て、ロンはにっこり笑うとからかってみた。

「ああ。残念！！けどおねえちゃんは親孝行するんだ！！」

ウールは墓穴を掘って、弟に傷つけられている自分の自尊心より、エルおばあちゃんのが気になったので、先を促した。

「早く出して。」

「・・・持ってないんだよ。おねえちゃん。今から取りに行くの。」  
それを聞いたウールは、やっぱりデマだったのかと、傷ついた自尊心の方を心配した。

「僕、聞いたんだ。おじいちゃんがね、ベラおばさんが来た時。必死に『なあ。くれんかのお？ライフコンピュータ。いいじゃる？

何でそう隠すのじゃあ……。』って言ったの。エルおあばあちゃんは、ライフコンピュターを付けてたんだよ!!」

「嘘!!あの時代はまだ世に広まってなかったはずよ?」

ナイロンは一生懸命、無い知恵を働かして姉に説明した。

「だから、ライフコンピュターを作ったのは・・・カ、カ、ええいつ!!ひいおじいちゃんだったろ?」

そのセリフだけで、弟が何を言いたいか分かったウールは、すぐに外着に着替えると、クズグズしているナイロンに向かって、早口で命じた。

「ロン。ウレを呼ぶのよ!!後、チビちゃんも。ウレに連れてこさせなさい!!」

慌てたロンは、一目散にウレの部屋に飛び込むと、さっき聞いたことを、そのまま言った。

「ウレを呼ぶ。あ、今やってる。後、チビちゃんもウレに連れてこさせなさい!!だって。ウレタン兄ちゃん。」

「はあ?お前は何が言いたいんだ。あのチビを俺が連れてってやれって?どこに。」

「だ、だから。ほら。ベラおばさん家。」

と、言うことで、全員揃ったベラおばさん家では、ベラおばさんとの交渉が始まっていた。

「う、うん……。け、けど・・・エ、エルちゃんは・・・誰にも・・・み、見せるなつてエ。。。」

すると、今まで不機嫌だったウレ・・・ポリウレタンが、サツと前に出てきて、はにかみながら説得にかかった。

「ええ。ベラおばさんは何も知らない。だから、いまから言うことにして頂けますか?」

「う、うん。エ、エルちゃんの孫とは思えないわ・・・い、いいわよ。。。。どうしたらイイの?」

ベラおばさんは、年とは思えない美しさで聞き返してきた。だが、

ポリウレタンはその美貌になれてたし、自分自身も、美形なことを知っていたので、大して気にせず話を進めた。

「勝手にエルの孫が来て、自分はダメだといったのに、ウールが『借りるだけですから』と言い張り、さっさと盗んでいった。と。言えばいいんですよ。ベラおばさん。」

ベラ・・・イザベラは、分かったという様に頷いて、ライフコンピユーターを渡した。

自分が言われたことに、疑問を持ったが自分が見たいといっただのでしょうがないと兄を見つめると、当の兄は、小声で『バーカ。反論しろよ。全部てめえの責任だぜ?』と言ってらアイコン（略してみた。）を持って去って行った。ロンは、姉の騙されやすい性格を笑うと、兄を追いかけて行った。

『この子は、私とアージュ・・・いえ、キュブラの間に生まれた愛娘。』ライフコンピユーターはそんな始まりだった。『この子の名前は、ポリエステルにしようかと思うの・・・だって、基本でしょう?素材の中の。』こののろけ話を黙って聞いている、ポリウレタンではない。

「おい。こんなのどうでもいいだろ?さっさと、問題の12歳へ飛ばそうぜ。」

「わ、分かってるわよ!!そんなの!!」

『ノメリコミタイプニヘンカイタシマス』

・・・ポリウレタンを除く3人がのめりこんでいった。

「また・・・。おいてかれちまったなア。」

。後に残ったのは、ポリウレタンの悲しみに満ちた声のみだった・・・。

## プロローグ（後書き）

ちなみに、ポリウレタンは美形です。

## 厄日改め祭日

彼女、ポリエステルは人の気配に目を覚ました。

「なんでいかねんだよ！！エル。」

いきなり飛んできた怒涛が誰のものか分かるのに数分かつたえるは、寝ぼけナマコで聞き返した。

「はぁ・・・？何言ってるの。レーザー？」

言いながら、四方八方にはねた艶やかな黒髪をなでつける。仕草だけは色っぽいのだが、可愛らしい・・・というか、子供っぽい羊のパジャマが台無しにしている。

「おまつ・・・！！今日何の日か分かってんのか？」

エルは目の前に迫ってくるツンツンとした金髪を避けながら考える。ちなみに、レーザー・・・ウレイザァーは茶色っ気のかかった金髪が、上にとがっていることを利用した攻撃を得意とする。

「あ、今日はカルトドウヴーか。」

やっと思い出したエルの目は、もう完全に起きた真っ赤に燃える目になっていた。

その眼を見て、少なからず怯えたレーザーは曖昧に苦笑いした。カルトドウヴーとは、元日とか、日の始まりなどの意味がある。銀河警察独自の言葉だ。

「ともかく行くぞ。エル。」

その言葉に、エルの表情が崩れる。苦々しげな顔で、皮肉る。

「レーザー。4年前に呼ばれちゃったおまえには、2年間呼ばれない私の気持ちは分からないだろうね。」

「何僻んでんだよ。2年間呼ばれないぐらい、世間一般範囲だぞ。」

エルは悲しそうに笑うと、立ち上がった。

「分かった・・・行くよ。行くから、レディーの着替えまで覗くつもりかぁい？」

途端に真っ赤になるレーザー。そして、さっさと退散する。

「お待たせえ〜！！ベールッ！！」

ベールッとふざけたように呼ばれたイザベラは、超絶美麗な顔をほころばせる。

「エ、エルちゃん……。き、来てくれたんだ。よ、良かった。」

艶やかな金髪は、可愛らしくウエーブしてレーザーを魅了する。そんな様子を一人微笑んでみている男　スタディが、ゆっくりと口を開く。

「そろそろ入らないとヤバイよ。みんな。始っちゃうよ。」

その声に3人は慌てて講堂に入る。

「では、今から銀河警察員発表会を行うっ！！」

レイウツド第一軍隊隊長は高らかに叫んだ。彼の茶色っ気のかかった金髪がふんわりと定位置に収まると同時に、歓声が上がった。何しろみんなが入りたがってる銀河警察なのだ。

銀河警察とは、銀河系から次々に送られてくる被害届などをもとに銀河の平和を守る警察組織だ。1軍から10軍までにわかれている銀河警察は、組織長（イザベラのお父さん）によってまとめ上げられており、新入りは1軍に入れられるのが通例だ。魔法を使った警護は、なんと隊員一人一人が『殺傷許可証』なんて言う物騒なものを持つてるほどだ。

「名前を呼ばれたものは、速やかに立ち上がりステージへ順に並びたまえ。」

その言葉に回りの雰囲気引き締まる。

「まず、今年は推薦入隊があるぞ。ホーム・ポリエステル。」  
推薦入隊とは、組織長（ベラのお父さん）が、条件を満たしているものなどを、ムリに入れることだ。

さて、ちなみに呼ばれたホーム・ポリエステル……。エルは、物思いにふけていた。

これって、なんで条件なんてあるんだろ。生涯試験10級なん

て、40歳まで私ムリだと思うなア。ソーヤー推薦入隊てさ、レイウッド隊長もそうなんだよね。てか、噂ではあの女顔にフアントム組織長が惚れたんじゃないか、って話もあるよねえ。じゃ、ベラのお父さんてホモ？・・・無いな。確かにレイウッド隊長は、ベラと互角の超絶美麗だけどさ、そんなのに惑わされなと思うんだよねエ。なんつったて、ベラに似たあの美しさ！！ホント、ミュージック家はいいよねエ。や。けどホントレイウッド隊長、美しいよね。なんで男に生まれちゃったんだろ。あの女顔は、見るものを射抜いちやうよお。腰まで降りる長い髪も、そのうえオールバックした前髪も、美しいんだよなア。男に妬いても仕方がないけど、妬いちやうよねえ？

もう、何の話か分からなくなってきたとき、そのレイウッド隊長の怒涛が飛んだ。

「おい！！ホームポリエステルはいないのか！！」

「はい！！おります！！スイマセンした！！先生！！」

エルが、自分が呼ばれたことに気づいて、いつも居眠りして怒られてる時を思い出して・・・先生つとか言っちゃった。なんて、どうでもいいんだが。とりあえず、美しい顔をしかめてレイウッド隊長はエルに静かに怒った。つもりだが、ほかの人には皮肉ったようにしか聞こえなかつたりした。

「速やかに、ステージに上りたまえ。誰が先生だって？まったく。

俺は隊長だ。覚えとけ。」

笑いが起こる。エルは、真っ赤になりながらステージに上がった。

エルは茫然んとしていた。いや、恥ずかしくもあつたのだが。推薦なんて、エリート中のエリートの証じゃないか。だって、過去推薦入隊したレイウッド隊長は、今第2位の地位だぞ。シーザー第2軍隊長だって、推薦入隊だし・・・。

「夕食よ〜降りてきなさい。」

一人だけのめり込めず、ただ見るモードにしていたウレは母親の声

に、にやついた。

そして呆けたように画面を凝視している兄弟を見ると外用の声音で、話しかけた。

「ごめんね、僕。入り込めないんだ。だから君たちの分まで、夕飯食べてあげるね。」

町の女の子をたぶらかす、甘い声で呟いたウレはその日、ハンバーグを4人分食べたとき。

## 厄日改め祭日（後書き）

ただ、ただエルはバカなんですよ？別に。変な思惑なんてありませんから。

ちなみに、ウレ君は、めっちゃカッコいいです。レイウッド隊長に勝ります。や、レイウッド君は、可愛いからなんですけど。とりあえず、次行きまひよか。

隊長様は頭の悪い生徒に優しく教え続けた。

「・・・以下。おい、エル分かってねえだろう?」

「ええ!!レイウツド隊長っ!!まさかテレパシーまで使えるようになったっちゃったんですかつ。」

レイウツドの美しい女顔は、極限まで歪んだ。そりゃあ。分かるだろ。窓の外を一心不乱に眺めてたら誰だって。そんな思いを隠して、もう一度エルのためだけにかみ砕いた説明をする。

「あんな。吸血鬼という、生物が、今回の、獲物だ。ここまでは分かるだろ?」

「あの。吸血鬼ってなんですか?」

レイウツド含め、第一群の者は肩を落としたり。その中には、レーサーなどの仲良し組もいるのだから、エルの見方などいるはずもない。

「あんな、吸血鬼というのはだなア。人の、血を、通じて、生命エネルギーを、取ることによって、生きながらえている、動物だ。」

噛み砕く口調に、幼稚園を想像した者は少なくない。エルは真剣に頷くが、レイウツドはハカセに対して『後で、マジに教えとけ。敗因がコイツになるとか最低だから。』と囁くほどの知識しか渡していない。

「いいか?次、行くぞ。で、名前は、エドワード。エドワードだ。分かったか?」

「えどーうど。ですね。はい!!メモしましたっ!!」

「するな。エドワードだっ!!誰がえどーうどなんて怪奇な名前をあげると言った!!」

誰もが、やな役を押し付けられた青年レイウツドの身を案じながらも、ドアの方へ体を動かす。

「あ、エドワーズでしたか。済みません。きっと略称はエドでしょうね。」

「もういい。エドワードだなんて言ってもわからんだろう。そうだ

な。エドワードでも、エドワーズでも略称はエドだもんな……。」「見かねたハカセが、応戦しようと身を乗り出した。

「ちなみにエドワードの略称は、エディですけど、関係ありません。話の本題は名前ではありませんから。それに、レイウッド隊長。関係ない我々は、帰ってよろしいでしょうか。」

応戦なのか、レイウッドを追い詰めているのか、どっちともとれるような話を切り出すと、ハカセは周りの隊員とともに、去ろうとした。質問は、形式なものだからだ。と、思っていたのだが。

「ああ。帰っていいぞ。オメエら。だが、ハカセとレーザーは残りやがれ。応戦しろこのバカのために。」

ほかの隊員たちは、飛ぶように帰って行った。しかし、ベラは帰り損ねていた。それを見かねたかのように、レイウッドが声をかける。「ごめんな、イザベラ。あの約束はまた今度にしてくれないか？ 明後日とか。どうだ？」

「あ、あさつて……。なら空いています……。すみません。では……。ま、また。」

しどろもどろになりながら帰ってゆくベラが面白いのか、レイウッドは少し笑うと本題を切り出した。……。もちろん、二人の関係についての揶揄は眼力で治めたのだ。

「この、エド・・・エディは、悔しくも、王家なんだ、細かく言うのと、王子、なんだ。で、この人には、捕まえて、いいか？ と、言う許可が、必要なんだ、ここまでは、分かるだろ？ いや、分かるな。次行くぞ。」

質問をしようとしたエルを、レーザーが力づくで抑える。そこに、ハカセが加担する。

「だから今度。王家に王様の許可をもらいに行くんだよ。エル。」

「なんで、バカー一人捕まえんのに、王家の許可がいるんですか？」

エルはレーザーをよけながら、必死に尋ねる。だけど、レイウッドは軽く無視して次に進めた。

「許可が取れたら、エド・・・エディを、探し出して、捕まえるん

だ。了解？」

「ええ！！場所分かってないんですかあ。」

甘ったれた口調にレイウツドが、軽く眉をひそめた。

「なんなら、お前に探す権利をやってもいいぞ。被害届が出てから4日・・・これでどの惑星にいるかもわからないヤロー相手に。」

「でも、せめてどの惑星かぐらいは分かりますよねエ。4日なら。それに、エドと隊長はお友達じゃないんですかあ？」

イラついたためか粗い口調になったレイウツドを、逆なでするようにエル言葉は無遠慮に発される。

「それをどこで聞いた。ハリー・ポリエステル。場合によっては吊るす。答えよ。」

「ちょ、こわっ！！ベラ！！ベラだよ。あ、ベラですよ！！なんかエルちゃんだけに教えるけど・・・とか、言ってたような気がしますね。自分的には、そんなので私の口が封じられるわけもないことを知っての確信犯だろうと心得てますが。」

急に饒舌になったエルは、自分を庇うよりいつも完璧優等生として名をはばからせている、ベラを攻撃することが楽しくなったのか、調子に乗って喋り始めた。

「何か、すごい話の合う仲だったとか聞いてますよ。私一人で抱えるのは重すぎて・・・なーんてほざいてましたよ。アイツは。」  
かなりレイウツドの傷をえぐったようだ　とエル以外の2人は察して顔を青くした。何せ、そのイザベラとの約束を蹴ってまで、教えてやるうとしたのだぞ？あのベラを！！蹴って！こんなバカのために！！そして、そのバカに蹴った相手を馬鹿にされている・・・最悪だ。なんてことは、エルじゃなかったら誰でも分かることだ。しかも、本当に仲が良いならレイウツドは今回の逮捕を、喜んでやっつてはいないだろう。そこを突くなんて。そんな空気を読んだのか、エルはさっさと帰ろうとした。

「あ。分かりました。今回の件は分からないたびに、ハカセに聞きますから。これで。」

「吊るし決定。屋上に行け。レーザーコイツをおさえる。ハカセ縄は納戸にある。取ってきてくれ。」

レイウツドか。確か七宝・レイウツドだったか。ミュージック家の親戚、いや側近だったはずだ。

しかも、このころは第一隊長らしいが今ではトップクラスの狩人になっており、74歳とは思えない手腕でメツチャ元気だとか聞いた。別名『天のギロチン』。殺す時、無駄無く首を刎ねるからだそうだ。美しいと思ったことを覚えている。俺が、この世で美しいと思っ

ているのはあの人と、クレスだけだ。  
あの人を見て、なんで『みんなは俺を世界で一番きれいだ』とかいうんだ？この人の前ではいらない自信がたっただけじゃないか。と悲觀的になったのを覚えている。老いても美しくあったレイウツドさんは、スクリーンの中で光り輝いていた。

「あいつら昨日もだったけど、今日も夕飯抜く気か？厳しいダイエットだなア。」

「ねえ、ポー君。ウルたちどうしたの？ホントにダイエット？」

「お母さん。ポー君と呼ぶのはやめてくれないかな？」

ポー君・・・失礼、ウレは微笑みながら答えた。答えにはなっていないが。

「ウル達は、まだ二階にいるの？いいえ。ウルはいいわ。リルだけでも一緒に食べたいんだけど。ママ、悲しいわ。」

「お母さん。今日僕は出かけなくちゃいけないんだ。チビちゃんを読んだら解放してくれる？」

「ママって呼んでくれるなら解放するけど。」

ウレは頭を抱えた。この馬鹿っぷりは、おばあちゃん譲りだったのか・・・。

「ママ。解放してくれるかい？」

「心がこもってないわ。ああ。今日はずっとこの家に来てくれるの

ね。ママは嬉しいわ。ポリー。」

心の中で『呼び名を統一してくれ！』と叫びながら、いろんな女を虜にしてきた笑みを浮かべて、粘り強く交渉した。

「ママ。好きだよ。今日家を抜けることを許してくれない？」

そんなウレを見ながらお父さんは、これでいいのか？と黙っていたのであった。

隊長様は頭の悪い生徒に優しく教え続けた。(後書き)

そうなんです。この家のパピーは無口なんです。あ、パパです。パパ。そして、エルはバカなんです。後で思い知りますよ。エルの馬鹿っぷりが気になっても気にならなくても続きをどうぞ。

## ドラキュラ城に遠足だ

「今日から一か月間、よろしくお願いします。ガイドを務めます、ライと申します。」

ライは、片方だけ羽の生えた頭を、深々と下げた。そして、みんなの疑問の視線から必死に耐えた。何しろ、ライはまだ1〜2歳の子供の様に見えたからだ。ただし、実際のところ彼女は17歳で会って、1、2歳など侮辱するにも程があるというものである。しかし吸血鬼という者は悲しい生き物で、なかなか老けない。そのせいで17歳の若く麗らかな彼女は、1、2歳に見えるという屈辱に戦っているのだ。

「レイウツド隊長様！！銀河警察は、ガイドを雇う金がそんなにも無いのですか！？」

「ふん。自分のみぐらい自分で守りたまえ、ジャック君。」  
思いつきり皮肉で返したレイウツドだが、この小娘だと道案内も出来ないのではないかと、本気で頭を抱えていた。だって歩くのも不安定なのだ！！どうして安心できよう？

何よりも、ライはちゃんとした吸血鬼じゃないのだ。混血の吸血鬼人間と吸血鬼の間にできた、忌子なのである。その為か、右半分に影響が出ている。右目は何があつたのか眼帯が巻かれ、頭に生えているはずの羽は左のみだ。牙も左のみ。

「五月蠅い！！進むぞ！！」

それから約9日間かけてドラキュラ城に向かって歩いた。（この間ウレは早送りをしていた。）

そして、10日目。彼らは無事に中間地点『寿園』についた。寿園は、いつもは修学旅行生を泊めている人間の施設だ。今まで野宿寸前だったエルたちにとってはまるで天国だった。

そして夜（ウレは早送りをした）。

エルは猛烈な渴きと共に目が覚めた。何しろ、出て来る物出てくる物、すべて赤っぽかったので、怖くて水分が取れなかったのだ。エルは周りの人を起こさないようにそろりと起き上がって、部屋から出て行つた。自動販売機求めて。あれならさすがに水ぐらいあるだろう。

「ポリ・テル・・・あると・・・無いのです!!」

話し声が聞こえてきて、エルは不思議に思った。なんたって、今は夜中。エルが起きているのはまだとして、喋るほどの時間ではない。好奇心旺盛なエルは、話を聞こうと壁に耳を寄せた。

「フフフ。あなたは外見しか見てないのよ。確かに、あの子は力がないように見えるわ。でもね、青になつたあの子はすごいよ。笑えるわ。すごい変わり方をするんだから。」

「私は外見で判断なんかしません!! キチンと、論理に導いた考え方をしていますっ!!」

「じゃあ、そんなにキンキン叫ばないで、笑えるものも笑えなくなつてしまつわ。」

「お願いします。見捨てないでくださいっ!! あなたしか、頼める人いないんです。」

「ふん、見捨てたりしないわ。フフフ。面白い。あなたの血筋をわざわざ見捨てるほど私はバカじゃないわ。ヴァンパイアの混血ちゃん。」

エルは息をのんだ。片方の声の主が分かつたのだ。この鈴を転がしたような美しい声。エルは一人しか知らなかつた。ベラ。ミュージック・イザベラその人ではないか。しかも、赤バージョン。

ベラは厄介な性格だつた。二重人格、一人の人に二つ以上の性格が一緒くたになつて表れてしまう性格。

厄介な事この上ない。ベラは、耳にかかっている愛らしいメガネをはずすと、目が真っ赤に（まるでエルだ）になつてしまい、どこまでも『笑い』を求め、『喜び』を求める冷酷人間になつてしまうの

だ！！（え？前後のつながりが見えない？知るか、本当の事なんだもん。）さて、ここでエルの好奇心はもつと掻き立てられた。ベラと話しているのは誰なんだろう？そう思い、勇気を出して小窓から覗いてみた。（エルは小窓の近くで聞いていた）

ベラはやはり赤だった。問題はそこではない。ベラの話し相手は、15歳くらいの少女だった。いくらエルが鈍くてもわかった。ライだ、と。もちろん身長は違う。年も違う。顔つきは微妙なところだ。でも、吸血鬼の混血なんて、ライしか知らない。少なくとも、ここにはライしかない。さつき見てた人と同じ人とは思えないくらい、神の色が変わっていた。腰まで伸びる黒のかかった茶色の髪。眼帯で隠していた右目は、美しく光っている。（ヴァンパイアの目は光を吸い込み、反射しない）牙も、心なしに引っ込んでいる気がするけど、服は同じだ。大きさが違うが。

「さて、今何時だと思ってるの？早く寝ましょ、あなたと違って私は昼型なのよ……。眠かったら、笑う気力もなくなるわ。」  
「ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバ男ヤバ沢ヤバ子じゃんか！！」

出て来るっ！！エルはそう思い、脱兎のごとく逃げ出した。自動販売機の方へ。幸いにもベラにも見つからず、自動販売機にも「ミネラルウォーター」らしきものがあつた。

何回も、何回もベラに聞こうとした。さりげなく「昨日の夜、どこ行つてたの？」って聞いてみようと思口を開きかけたが「ライと話してたの」と、答えられるのが怖くて……。

ベラには、友達がいなかった。その綺麗な顔立ちにの横に並んだら見劣ってしまうからだと思う。私にも友達がいなかった。ここ、銀河警察（神の家）では、神の色は茶色が通流で、黒なんてありえないつつつか、前例が無い状態なのだ。それで、怖がられ人格を無視した、外見だけの拒否を2人ともうけていた。ベラは私の唯一無二の存在。たった一人の親友。幼い独占欲だろうが、私はベラに友達

ができるのが嫌だった。私に向かってだけ笑ってほしかった。2人の時は少し滑らかなになる話し方も、すべて大好きだった。赤の時も怖くはあるけど、好きだった。信念のある感じに憧れもしたものだ。ヴァンパイア城についた時、ライは赤いスカーフを付けていた。礼儀正しく別れを告げた。

「今日限りで、ガイドを終了させていただきます。今までありがとうございました。」

けど、エルはライの声も隊長の声も聞いてはいなかった。赤いスカーフ。あれは『サーベルの破』。ベラとお揃いだ。ベラと！！あれは、ベラがお父さんから3歳の誕生日にもらったもので、家庭科を滅亡の危機に突き落とす、危険なものだった。あれは世の中に50個程度しかなく、ほとんどベラのお父さんが所有していた。使い方は、自由。頭の中で思い浮かべたものが、若干の魔力と引き換えに真野が出て来る便利なものだ。しかし、それを生業としている家庭科からすれば、面白くないのは必然だ。ベラにおふざけで言ってみたことがある。『それ、可愛いなア。頂戴よオ。ベラ。』けど、ベラは真剣な表情で返した。『お、大人になったら・・・ぜ、絶対あげるわ。』と答えられた。それを、ライは首につけている。ベラは胸元でリボン結びをしている。

ベラは歩みだしていた。ヴァンパイア城に。足を踏み入れていた。もう、守る必要はない。前みたいに、『エルちゃん。ここ、怖いよ。』とすがりついてくれない。

エルは、誰も守るでもなく、誰に守られるわけでもなく、一人で足を踏み出した。

彼女自身も、一人で歩もうとしたのだ。すがっていたのは彼女だったのかも知れない。

「ポ一君。お願い。今日は、外出許可するから。」  
「ママ。僕は今日、外出したくないんだけど。」  
「明日の分。許可するから。ウル達を呼んで頂戴。」  
「行きます。ママ。もちろん。」  
ウルは意気揚々と立ち上がると二階へ上がって行った。

## ドラキュラ城に遠足だ（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。たぶん、次はオマケになります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9646y/>

---

エルおばあちゃん達

2011年12月16日23時47分発行